

ネットワークはねむらない

１．ネットワーク、まずはリンクが大切

ネットワークとは、すべてのサイトがつながっている、ということです。この本質は「リンク」にあります。サイトそのものよりも、リンクですべてがつながっている、という「関係」こそが重要なことです。関係は、サイトの内容を問いません。自分のサイトに、主張したい内容がなければ、ネットワークがスムーズに動きます。つまり主張することが何もないとき、そこにアクセスしたひとは、そのサイトを通過して、他のサイトにどんどん移動していくはずです。つながることだけを重視したら、一つのサイトにじっとすることは、ネットワークの本質からはずれることになります。ネットワークは、だから「動く」ことに価値があります。そこに着目したのが、ヤフーなどのサーチエンジンのサイトです。ここには、自分の内容は皆無に近く、あるのは他のサイトへのリンク情報だけです。自己主張しないことが、結局は自己の存在を強烈に証明している、という皮肉な逆転がここに見られます。地球規模でつながるとき、内容よりも、まずはリンクという関係こそが、ネットワークの維持には必要なのです。

ネットワークはねむらない

2 . ネットワークは、ねむらない。

ネットワークは、24時間つながっていないと、意味がない。現状では、多くの人がダイアルアップでネットワークにつながります。しかしそれは、ネットワークの本質から考えると、許されないことです。なぜか。それは、ダイアルアップでつながったときだけ、自分に必要な情報をネットワークからとってこよう、というエゴ丸出しの行為であって、自分のもつ情報をネットワークに公開していない、という点で、インチキな行為といわざるをえません。ネットワークでつながる、ということは、自分に都合のいい時だけ、参加して、後は知らない、という精神ではいけない、のです。だから、ネットワークは24時間つながらないといけません。一日でも早くダイアルアップの生活から解放されないといけません。

言いたいことは、ネットワークで何かをするという『行為』ではなく、24時間つながっているという『環境』が重要だ、ということです。ダイアルアップは、その環境として失格です。24時間つながっている、というネットワーク環境が整備されないかぎり、ネットワーク社会の到来はありません。まだまだ、ぼくたちの社会はインフラ整備においてさえ未完成なのです。

ネットワークはねむらない

3 . ネットワークは、身体に装着される

ネットワークは、いつでも・どこでも利用可能でなければならない。ネットワークは、時間と空間の制約（「いま」と「ここ」）を超越するのだ。24時間つながるばかりでなく、どこからでもネットワークにつながる環境が必要である。ということは、ネットワークの環境は、個人に装着されなければならない。

従来、環境は場所に設置されていた。家庭であり、職場であり、人は、その場にいることではじめて行動することができた。ネットワークの環境も、それ自体移動することのない場所が求められた。そこでは、人間は、今までと同じように、自らその場所に移動することで、やっとネットワークにつながるのだった。

しかしこれは、ダイヤルアップの発想が間違っているように、ネットワークの思想にふさわしくない、間違った発想である。ネットワークの環境は、もはや場所ではなく、個人の身体に装着されなければならない。行為する主体そのものに環境が装着されたとき、はじめて「どこでも」の条件がみたされる。腕時計・手帳・携帯電話のように、メディアは身体に装着されなければならない。そのとき、「ここ」という不動の場を越えて、まさに移動しながらネットワークにつながる、ということが可能になる。ネットワーク環境には、モバイルギア（ウェアラブルコンピュータ）が不可欠である。

ネットワークはねむらない

4 . ネットワークは、境界を無視する。

イントラネットは、ネットワークの精神に反する。これは、重要なことである。では、何が違うのか。イントラネットは、しっかりとした境界を維持しようとしているから、違うのだ。そこでは、内部と外部が明確な境界線で分離され、内部は内部として完結し、そこでの関係が優先される形でシステムが維持されている。これはシステムではあっても、ネットワークではない。 ネットワークの基本は、境界をもたないことだ。つまり内部と外部という弁別はここにはない。すべてが内部であり、同時にすべてが外部なのだ。ネットワークに参加するすべての人は、どこと関係をもっても、その関係は等価であり、その関係が階層化されることはない。だからネットワークは、その本質において、グローバル・ネットワークなのである。 インターネットは、個々のローカルなネットワークが自己増殖した結果、つながっただけのことである。しかもそれぞれのローカル性は、その発生においてローカルであるというだけのことで、本質的には境界を維持しようとしなから、その必然の帰結としてどんどん自己増殖し、それが他のローカルのネットワークと融合し、そして世界中に拡散していったのである。インターネットは、こうして、境界を無視することで生成したはじめてのシステムである。境界を無視できないイントラネットとは、その精神が異なる。ネットワークは、インターネットのように、境界を無視しなければならない。

ネットワークはねむらない

5 . ネットワークは、グローバル・シチズンを求める。

ある人がネットワークに自分をつなげたとしたら、その人は一気にすべての人につながってしまう。かつてのように、まずは何人かの仲間から始めよう、という発想はない。「小規模から始めよう」は、典型的な「境界」の考え方なのだ。まずは小さく、そして徐々に大きく、という段階的拡大の発想（これは、境界と階層をミックス）は、ネットワーク以前では自明ではあっても、ネットワーク環境では、無視されなければならない。ネットワークでは、自分はストレートに世界につながる。これがネットワークのおもしろいところだ。最初から、世界のなかに放り出されて、さあ、自由に好き勝手に動きなさい、と解放させられてしまう。いまから、あなたは世界市民（グローバル・シチズン）だ、と、一方的に宣言されてしまう。ネットワークは、容赦なく、すべての人に、まったく新しい自分のアイデンティティを求めよ、と迫る。

どうすれば、いいのか。「自分は小さい、世界は大きい」。その大きさの違いを、どう縮めればいいのか、そのために自分の世界を徐々に拡大して、本物の世界の大きさに少しでも近づけよう、と発想することだろう。しかしこの常識は、間違っている。間違っていないとしても、時代遅れの発想で、ネットワークには似合わない。ネットワークでは、最初から自分は世界そのものなのだ、という自覚が必要である。グローバル・シチズンになりきることがネットワーク市民（ネチズン）には不可欠である。 ker@sfc.keio.ac.jp これは、ネットワークに入るとき必要なアイデンティティ（自己証明書）である。これは、グローバル・シチズンとしての新しい自分の名前で、世界に一つしかない名前だ。これは、もっとも重要だとされているローカルな自分の名前（熊坂賢次）よりも、もっと大切なものだ。自分というアイデンティティは、ローカルな自分ではなく、グローバルな自分としての存在証明が必要になってくる。それがネットワーク社会なのだ。ネットワークは、必然的に、世界市民というもう一つの自分を要求するのだ。

ネットワークはねむらない

6 . ネットワークは、情報発信をしない。

たとえばミニFMならば、身近な地域にたいして、自分の好きなことを放送できる。いま、パーソナルな放送局の可能性ができる時代になった。ネットワークでも、同じように、誰もが自分の情報を発信することができる。その意味で、まさに誰もが簡単にパーソナル放送局を開局できるようになった。誰もが、ネットワークを通して、自分の放送局から自分の好きなことを世界中に放送できる。自分専用の放送局をもっていれば、世界中の人と容易にコミュニケーションできる、というわけだ。しかしここには重要な欠陥がある。それは、情報は発信するものだ、という誤解である。ネットワークでは、情報は発信するものではない。つまり世界との関係は、ネットワークの環境では、自分から情報発信してつなげるものではないのだ。ネットワークにおける関係は、相手からつながってくるのをじっと待つことで、初めてつながる、という認識が重要である。だからネットワークは放送局であってはならない。自分の情報は発信しないで、ただ自分のところに置いておくだけである。相手がほしい情報を求めて、自分のサイトにたどり着いたとき、そこに初めて関係が成立するのだ。自分は、客が来るのもじっと待つショップのオーナーである。関係は、つなげるものではなく、つなげてもらうものなのだ。つまりネットワークの環境では、魅力がないかぎり、誰もアクセスして来ないし、そこでは関係は成立しないし、だからといって、つまらない情報しかないのに、安直に世界にダイレクトメールを打たないでほしい、というルールが必要なのだ。情報発信というコンセプトは、もう古い。

ネットワークはねむらない

7. ネットワークは、情報所有を求めない。

情報発信するには、情報を所有していなければならない。しかも情報発信に価値が発生するには、その情報が希少であることが不可欠であるし、その希少な情報を所有することで、はじめて発信することが社会的に意味をもつ。これがいままでの情報についての基本的な考え方である。しかしネットワーク環境では、情報発信はしない。その根拠はなにか。まず重要なことは、情報を、人は所有していない、という認識である。欲しい情報が手元には何もない、ということがネットワークでのコミュニケーションを始動させる第1歩である。人は、情報を所有していないから、ネットワークの環境のなかで、情報を求めて探索する。だからサーチエンジンがネットワークでは不可欠なツールなのである。つぎに、自分のほしい情報は、ネットワークのなかで誰かが保有している、という認識も重要である。しかも、その誰かは情報を保有しているけれど、発信をしないで、じっと待っている（つまり自分のホームページに情報を載せている）だけである。そしてそこにアクセスしたとき、自分のほしい情報が得られる、という仕組みがネットワークである。誰もが、情報を所有していないから、情報の希少性は関係ない。情報を保有しているのはアクセスした先で、しかも先方はネットワーク上に無限？に散在して、じっとしているだけだから、情報を所有する意志はそこにはない。だから、すべての先方はネットワーク上に情報を公開しているだけである。とすると、ここでは、情報は、探索された行為にたいして、支援するために存在する、という関係が発生する。それが、情報を共有することで成立するネットワークである。ネットワークにおける関係の基本は、したがって、情報所有と情報発信ではなく、情報非所有と情報探索であり、その行動を支持する情報支援と情報共有の関係である。これは、いままでのコミュニケーション行動を根本から変革する大きな認識枠組である。

ネットワークはねむらない

８．ネットワークは、ボランティアを求める。

ネットワーク環境では、自分の情報は他のすべての人のためにあり、他のすべての人の情報は、自分を支援してくれるためにある。これが基本原則なのだ。

なぜ人は、自分のホームページをウェブ上に公開しているのか。それは、自分が保有する情報が他のすべての人に価値あるいは必要（ニーズ）があるならば、「どうぞご自由におとりください」と言っているのだ。もちろん、見たければ、お金をとるぞ、というサイトもあるが、これは、ネットワークの原則を理解しない、今まで通りの思想（近代社会の交換の論理：私的所有権はその法的背景）に基づいた、時代錯誤の行為なのだ。

ネットワーク環境では、人はすべて、「知りたい、でも、知らない、だから、誰か助けて」という弱い人であり、その前提に立脚して、コミュニケーションが発動される。だから、情報探索がスタートで、情報支援が、それに応えることで、コミュニケーションが成立するのだ。

いまもって常識である情報発信と情報受容のコミュニケーション図式は、もう古い。これは、情報を所有している人と所有していない人の落差を利用して、情報が伝達される図式で、これは、対面的で閉鎖した関係に典型的なコミュニケーション・パターンで、ネットワークという、非対面的でオープンな環境ではふさわしくない。ネットワークは、相互に情報探索し、相互に情報支援する関係をもっとも優先する環境である。これは、ボランティアそのものである。すべての人が、弱い自分を前提にしてコミュニケーションをするとき、そこでは、すべての人は、必然的にボランティアとして行動せざるをえない。一部の弱者にたいして、一部の強者がやさしさを振りまく、という特殊な関係としてのボランティアではなく、すべての人が弱いことで、その人の心理（やさしいとかのボランティア精神）に関係なく、誰もが、社会的な関係（社会的な役割）においてボランティアとしての行動を余儀なくされるのであるネットワークは、どこまでもボランティアとしての行動を、すべての人に要求するのだ。

ネットワークはねむらない

9 . ネットワークは、ポップメディアだ。（参加の自由）

ネットワークは、つなぐという点では、メディア（媒介）である。では、どんなメディアなのか、というと、それは『ポップメディア』だ、といたい。なぜか。 ポップメディアであることの条件の1つは、誰でも参加できる、ということ。上手・下手のように、なんらかの制約を設けるようなルールを無視して、自分が好き勝手に何でも思うように表現でき、それが、すべての人に公開できる、ということ。「表現の自由」と「公開の原則」からなる、『参加の自由』が、まずは重要である。

今までのメディアでは、プリントものにしろ、映像にしろ、プライベートの世界ならばともかく、パブリックの世界では、ある種のフィルターがかかって、誰でも参加できる、ということではなかった。うまい人、偉い人、専門家じゃないと、メディアには載せられなかった。ホームビデオならば、かまわないし、自分だけのアルバムの世界に閉じこめるだけの写真なら、かまわないし、日記をつけるだけならば、どんなテキストを書いても、誰も文句は言わなかった。すべては、プライベートとパブリックという境界を守り、そのなかで、ひっそりとプライベートに楽しむならば、なにをしても許された。しかしいったんその境界を無視して、パブリックの世界に公開すると、一気にバッシングが待っていた。これは、プロの芸じゃないんだから、駄目だよ、というわけだ。

しかしネットワークには、プライベートもパブリックもない。基本的に、ネットワークには境界はない。すべては、ぐずぐずである。明確な境界を引かないことがネットワークの本質である。とすると、ここには、上手だから載せる、下手だから載せない、というルールは意味を失う。つまり、ネットワークは、電話のようにプライベートメディアでもないし、テレビのようにパブリック（マス）メディアでもない。ネットワークでは、どんなものでも、参加自由である。誰が何を載せても、かまわない。これが基本である。ネットワーク上での公開を前提に、何を載せてもいいという表現の自由を守ることが、参加の自由の原則である。これが、ポップメディア成立の第1の条件である。プライベートな表現の自由と、公開というパブリックな原則が保証されるところに、ネットワークの存在意義がある。ネットワークがポップメディアだ、という意図は、したがって、プライベートとパブリックの境界を超えたところに設定される、まったく新しい参加方式の提案なのである。

ネットワークはねむらない

10. ネットワークは、ポップメディアだ。（編集の自由）

ポップメディア成立の第2の条件には、まずはコピーの自由が不可欠である。ネットワークでは、オリジナルとコピーの境界が無視される。オリジナルとコピーは、基本的には等価である。オリジナルの所有権は保証される（これは、だれの作品なのか）が、それがネットワーク上に公開されたならば、それを誰がコピーし、それをいかに手を加えようが、それはすべて許容されなければならない。上手な作品をコピーすることは、自由であるし、それをもとに新しいオリジナルが再生されることも自由である。オリジナルへの敬意は十分に尊重されるが、ネットワーク上に公開されたならば、オリジナルがコピーを拒否する権利は放棄されなければならない。オリジナルは、無限にかつ多様にコピーされることで、ネットワーク上で共有される財産になっていくのである。ネットワークの価値は、希少性ではなく、アバダンス（無限なまでの豊かさ）であり、それを共有することがネットワークの価値である。

オリジナルがオリジナルのままで、1つ（希少性の極限）であることに価値を見いだす、という発想はネットワークにはなじまない。ネットワークでは、すべての資源がどんどん融合し拡散しなければならない。そのためには、オリジナルは、その原型をとどめないまでに、コピーを媒介にして、融合され拡散されなければ、価値を誘発しない。ネットワーク上で、みんながオリジナルを介して、積極的に関与し、オリジナルを多様に変容させる編集プロセスこそが、ネットワークに参加することの意義である。オリジナルがオリジナルとして閉じることなく、つねに新たな編集プロセスが次から次へと絡まなければ、ネットワークではないのだ。ネットワークは、どこまでいってもオープンである以上、オリジナルもつねに変化しなければならない。不変なオリジナルは、価値がない、という証明でしかない。オリジナルの変容は自明なのである。それには、まずはコピーが不可欠であり、さらにそこに協働（コレボレーション）的な編集プロセスが関与しなければならない。これが、ポップメディアであることの第2の条件である。整理しよう。ネットワークではオリジナルの無限の変容こそ価値があるので、それには、オリジナルを「コピー（模倣）する自由」と「コラボレイティブな編集プロセス」が不可欠である。これを、『編集の自由』と呼ぼう。編集の自由が、ネットワークがポップメディアであることを支える第2の根拠である。

ネットワークはねむらない

1 1 . ネットワークには、アバンダンス（豊かさ）がにあう。

希少性の原則にこだわるかぎり、ネットワークは理解できない。ネットワークには、『よいもの（goods）はたくさんある』というアバンダンス（豊かさ）の認識が必要である。その認識が理解されるとき、そのよいものを媒介にして、すべての人々が相互に共有したり公開して、よいものを「よりよいもの」にしようとする関係がネットワークのなかで生成される。こうして、よいものは、公開されてさらに多くの人々に共有され、そして、さらによりよいものへと変換されていく。

情報の公開と共有が、よいものをさらに多くの人にもたらし、しかもよりよいものを創造する、という関係が生成される。これが、ネットワークにおけるアバンダンスの原則である。情報の秘匿と所有は、「もの」の希少性を前提とする貧しい世界では、基本原則にならざるをえなかったが、ネットワークの世界では、そのような原則は放棄されなければならない。ネットワークの世界では、希少性は無意味なコンセプトである。

よいものはたくさんある、というアバンダンス（豊かさ）の原則が生きるには、情報の公開と共有が不可欠である。よりよいものを、自分ひとりではなく、みんなに公開して、みんなとのコラボレーションをとおして創造していこう、という考え方が必要である。

そもそも情報は、その本質において、所有する価値がない。「もの」が、その所有する主体から離れた瞬間、その主体のもとには存在しえない特性をもつのにたいして、情報にはそのような性質はない。「もの」は、他人にあげれば、すでに自分のものではないが、情報は、いくらしゃべっても、自分の頭から消えることはない。「もの」が基本的に所有されることに価値をもつのにたいして、情報はすべての人に共有されることに価値をもつ。「もの」は、それを所有する人によって、その価値が強く規定されるけれど、それとは対照的に、情報は、それを共有する関係によって、その価値が規定される。しかも共有する規模が大きくなり、情報公開が徹底されるほど、またそれによって、情報それ自体の再創造が生成される過程によって、情報の価値はますます増大する。このように、情報は、その本来的な特性において、希少性・秘匿・所有を排除し、創造性・公開・共有を自明とする。これが、アバンダンス（豊かさ）の原則を支えるのである。

ネットワークでは、情報は、公開と共有によって、無限に新しい情報へとつねに創造されていく。この創造プロセスが、よいものは無限にある、という豊かな社会をうみだすのである。ここでの豊かな社会は、ものにあふれる、という50年代の社会的な意味を超えて、ここにおいてはじめて、ネットワークでの情報の基本原則（アバンダンス）によって、まったく新しい社会の構成原理として再構築されるのである。

ネットワークはねむらない

12. ネットワークは、既存のコミュニケーション論では解けない。

既存のコミュニケーション論は、対面的（face-to-face）なコミュニケーションを前提に考えられていた。しかも、それが一般的なコミュニケーション理論を構築するときのモデルであった。そこでは、コミュニケーション状況には、たった2人しかいない。これがモデル作成の原点である。その2人が関係をもとうとするとき、どのようにしてコミュニケーションは展開されるのか。当然、情報を所有する人が、情報を所有しない人にたいして、そこでの情報落差を利用して、コミュニケーションが始動される、と考えることが自然であろう。こうして、情報所有と情報発信の考え方がコミュニケーション論の基本原則になっていった。2人が共に情報を所有していれば、「交換」という形態になるし、他方、1人しか情報を所有しない場合には、その人がコミュニケーションを一方的に支配するので、「権力」といった形態が発生することになる。どちらにしても、情報所有と情報発信から、コミュニケーション理論が作成されることに相違はなかった。

マスコミュニケーション論も、この流れにある。これは上記のコミュニケーションの権力形態の特殊ケースで、情報所有・発信の主体が放送局のようなマスメディアだけで、情報非所有・受信の主体が「大衆」という「無数のしかも匿名の人々」の集まりである、という関係で特定化されたケースである。ここでのコミュニケーションは、マスメディアが一方的に情報を所有し、それを所有しえない大衆（マス）にたいして、一方的に情報伝達してみせるだけのである。ここには、2人モデルからはみ出る問題は何もなく、大衆はマスという大量ではあっても同一の個性をもつ1つの他者でしかない。マスは、どこまでもひとりで、しかも情報を受信するだけの受動的な存在にすぎない。

このようなコミュニケーション論では、もはやネットワークを解読することはできない。ネットワークでのコミュニケーションは、対1のダイアドモデルではなく、無数の人々が相互に関係をもつN-Nモデルである。そこでは、すべての人は、情報探索からコミュニケーションを開始する。つまり情報を所有していないからこそ、ネットワークに参加してコミュニケーションをとろうという動機付けがなされ、そしてネットワークを介して情報探索がなされる。そのとき、ネットワークは、情報探索の支援するすることが使命である。したがって、ネットワークのコミュニケーションの基本は、情報探索と情報支援のセットから構成されなければならない。その時、情報支援は、情報探索を開始した人にたいして、個人的な関係の有無に関係なく、ネットワークを介して自動的に情報支援がなされる。メタファを使えば、「独り言の世界に無数の自動人形が応答してくれる」ような関係である。ネットワークの壁に向かって、「助けて！」と叫べば、ネットワークは、ふさわしいお助けマンを紹介してくれるのである。こうして、パブリックな関係を通して、もっともプライベートなニーズが満たされる装置がネットワークのコミュニケーションなのである。

ネットワークはねむらない

13. ネットワークは、匿名性（マス）を嫌う。

ネットワークでのコミュニケーションは、匿名性を前提に行われる、という誤解がある。まったく、その反対で、ネットワークは匿名性を嫌う。これを、自覚しなければならない。このような誤解は、すべて、マスメディアとネットワークを同じ情報環境にあると信じているところに帰因している。マスメディアの環境では、情報が発信され受信される関係を基本的なコミュニケーションとするから、一方的に受信するだけにすぎないマス（大衆）は、基本的には匿名にならざるをえない。ここでは、受信者は誰でもマスという存在でしかなく、個人としての存在は期待されていない。ただじっとして、情報を受信すればいいので、それ以上の自己の存在証明を求める必然性はマスメディアの環境にはない。

しかしネットワーク環境では、そこで情報行動を行う人は、マスではない。しっかりとした名前（メールアドレス）をもっている。これは、世界市民の名前であり、世界に1つしかない、自分そのものの名前である。ネットワーク上の名前は、親から授かった生まれながらの名前よりも、ある意味では、もっと大切なものである。それは、決して匿名ではなく、個人ひとりひとりに固有の、かけがえのない名前である。その名前を、多くの人は、ヴァーチャルと呼ぶことで、あたかも匿名性があるような言い方をするが、それは、まったくの誤解である。この名前は、どこまでも個別の名前であって、そこに匿名性はない。つまり代替不能な名前である。たとえば `ker@・・・` という名前は、ぼくという個人以外のいかなる人にも使えない名前であり、ぼくという個人の存在を証明するに十分に値する名前である。

すると、つぎのような発言が聞こえてくる。一人の人で、多くのプロバイダーからメールアドレスをもらうことで、たくさん名前をもつ人はいるだろう。それは、どうなのか、と。この事実、名前は、そもそも個人にとって1つである必要はない、ということにすぎない。人は、本来、名前をたくさんもつ。たとえばあだ名は、その人にとって重要なもう1つの名前である。人は、状況に応じていろいろの顔をもつように、また偉くなるほど、いろいろの名刺をもつように、そもそも人は多くの名前をもつものである。しかしその個々の名前は、決して匿名ではなく、その人個人に固有の名前ばかりなのである。

ネットワークの環境では、いろいろの名前をもつことが可能である。1つでもいいし、いくつもってもいい。その数自体が、その人の個性の表現である。繰り返すが、名前をたくさんもつことは匿名性ではない。ネットワークは、匿名でコミュニケーションすることを許さない。ネットワークでは、いろいろの顔や名前をもつが、それはすべてその個人の存在を証明する印である。

ネットワークはねむらない

１４．ネットワークは、マッチングが命。

ネットワークに、なぜ人は参加するのか。それは、自分のもっている情報が他の誰かに必要とされるならば、その人のために貢献したいからであり、同時に、自分がほしい情報があれば、それを他の誰かが助けてくれるだろうという思いからネットワークに参加するのである。こうして、無数の人がネットワークに参加してくる。

とすると、一方に情報を欲しい人たちが無数にいて、他方にはその欲求にこたえる情報をもつ人たちが無数にいる、ということになる。この無数にある「欲求と情報」の間に橋をかけることが、ネットワークの登場によって、はじめて可能になった。それ以前には、一部に限定されたかぎりでは、「欲求と情報」の交換が成立していたが、ネットワーク環境の成立によって、無数の欲求と無数の情報の間をマッチングすることが可能になった。しかもそれは、交換のように、まずは情報を所有する人からの情報提供があって、それに見合う報酬を払うことで、情報が獲得されるのではなく、情報をもっていない人が欲しいと言うと、ネットワーク上をエージェントが走って、情報提供者を探してきて、無償で情報獲得ができる、という「探索と支援」の関係が成立している。

ネットワークは、無数の「欲求と情報」のマッチングを無償で成立させる。なんでもいいから、欲求と情報があれば、その間をつなげて、欲求に合致した情報を提供するのがネットワークの仕事である。従来ならばできなかったような、つまり市場を形成するにはあまりにも特殊であったり、儲からなかったりした欲求が、ネットワークを介せば、あっという間に情報入手できる環境が形成される。

老人介護の手がほしい、草野球の相手がほしい、登校拒否している子供にどう接すればいいのか、なんでもいいから、ある情報が欲しいと叫べば、どこからかお助け情報が入ってくる。無数のお願いに合った情報を探索して支援してくれるのがネットワークである。この意味で、ネットワークは今までにない最大級のマッチングの装置であり、情報が欲しい人に最高のプレゼントを贈る装置である。

ネットワークはねむらない

15. ネットワークは、無数の物語をつくりだす。

言行一致という考えがある。これは、言うこと（情報）とやること（行動）が一致する、という意味であるが、それ以上に重要なことは、情報が行動に一致しない場合、その不一致を実践する人は、うそつき、とレッテルが貼られる、ということである。なぜなのだろう。簡単に言えば、行動が情報にたいして上位に位置するという前提があるからである。行動は、情報を集約した結果であり、結果は成果であるから、善悪や真偽などの価値判断を下す際に最優先させるべき評価基準となる、というわけである。だから、どんなにいいことをしゃべっても、実行が伴わないと、その人は、言うだけの人で、何もできない、だらしない嘘つきということになる。これが、言行一致が求める含意である。

行動の連鎖によってのみ、現実とは、社会的事実となり、かつ実感となるべきだ、という考え方が自明とされるかぎり、情報は、いつも行動のために尽くす道具であり、行動と一致 / 不一致から判断されて、その評価の善し悪しが決定される「しもべ」にすぎない。行動が世界を構成し、個人を構成する原理である。しかも行動は、情報が提示するすべての可能性の中から「選択」させた秩序である。さらに、その選択の基準として合理性を設定したのが、いままでのモダンの社会である。だから行動で世界を構成しようとするかぎり、世界は秩序ある一つの世界 = 物語として存立することになる。世界は、いつも選ばれた合理的な因果連鎖の物語である。

ネットワークの社会では、言行一致は期待されない。行動は結果であったとしても、それは虚しく選択された現実 / 実感であり、たった一つの世界にすぎない。重要なのは、選択されなかった、無数の可能性をもった情報の多様性にある。情報の世界は、編集される以前の、無数にある世界そのものである。いかようにでも編集可能な素材の集合であり、そこから無数の物語が描き出されるデータプールである。そのデータプールが、ネットワーク環境に解放されたとき、人々は、それぞれの無数の物語を語り始めるのである。いま、ネットワーク環境のなかで無数の自分史を公開することができるようになった。無数の自分の交差のなかに、時代を見つけようとする試みがなされている。これは、客観的世界でも主観的世界でもない、まったく新しい間主観的な世界を創造する試行錯誤の実験なのである。ネットワーク社会は、無限の物語が織りなす世界として再構成されなければならない。新しい歴史が書き換えられる時代が始まるのだ。

ネットワークはねむらない

16. ネットワークは、信頼関係の根拠を自己責任に求める。

ネットワークでは、知らない人とコミュニケーションをすることが、基本だ。この場合、知らない人とのコミュニケーションを支える信頼の根拠は、どこにあるのだろう。そこで、信頼の根拠を、昔のコミュニケーションから振り返ってみよう。

みんなが知り合い同士の昔のコミュニティ、原理的にはパーソナルコミュニケーションの世界では、身体的な接触を伴った知り合いという日常的な事実（「いま」と「ここ」の共有）が相互の信頼を成立させる根拠になっている。だから、知り合いの関係なのに、もしも信頼を損なうような事件（相手の予期を裏切る行為）を起こすならば、その人は、知り合いの関係から排除され、法外者としてコミュニティから排除させるだけである。だから信頼は、知り合いという日常性のなかにすでにセットさせている。だから知らない人は信頼されず、コミュニケーションはここでは成立しない。

つぎにマスコミュニケーションの時代になって、はじめて一方的にしか知らない関係が生まれ、スターと大衆の関係のように、知られている人（だが、このスターは、相手を知らない）と知られていない人（大衆という、スターを知っている人）という関係が発生した。ここでは、知られているスターは大衆を知らない人で、知っている大衆は知られていない人という歪んだ関係になっている。このような、一方的な認知と場の非共有（テレビなどのマスメディアでしか会えない）という状況のなかで、相互の信頼はいかにして生成させるのか。ここでは、スター（それを支える大組織）という情報発信サイドが所有する権威が、大衆からの盲目的な依存（価値委託）を誘発するのである。この階層的な関係そのものに潜む権威が放つオーラに、大衆は価値（貨幣・権力・威信・尊敬）を無条件で譲渡するのである。こうしてマスコミュニケーションのなかでは、権威による信頼関係が形成される。マスメディアは権威そのものである。

さらに、サブカルチャーの時代になると、どうなるのか。いわゆる「おたく」のコミュニケーションを支える信頼の根拠が問題である。ここでは、似たもの同士の共感という関係が信頼をもたらす。サブカルチャーという特殊なコミュニティメディアを通して知り合うことで、外部に対して閉じたところから発生する自分たち固有のジャーゴンを用いることで、自分たちだけにしか理解しえない密室的な共感をもとに、信頼が生成される。おたくは、この独自の共感をもとに信頼関係を築き、だからこそ、その領域に閉じこもることで、自由なコミュニケーションを相互発信させるのである。

このように、信頼をもたらすキーコンセプトは、日常性・権威・共感であったが、では、ネットワークの世界では、なにが信頼を呼ぶのであろうか。ここでの関係は、お互い知らない同士である。知らない者同士が、では、いかにして信頼関係を築くことができるのであろうか。それは、自己責任である。つまり知らない同士であるから、知り合いの裏返しで、裏切られることを自明として関係を形成するしかなく、また同時に、ここでは、情報は探索・支援の関係を優先するので、未知の人からの支援は、相手の優しさに依存するものではなく、単純にシステム（つまり支援はエージェントの探索の結果だから）に依存するものなので、支援情報の評価はすべて自分の自己責任においてなされなければならない。自己責任がルールとして確立していないと、裏切られた、などの無用な騒ぎになるので、そもそもそういった無用な情報が支援として飛び込んでくるから、その混交玉石の情報の束のなかから自分に必要な情報を選択することが、自己責任において実行されないかぎり、ネットワークはうまく作動しないのである。とすれば、自己責任のルールによってのみ、知らないもの同士の信頼関係は生成させない。かくして、ネットワークは、信頼関係の根拠を自己責任に求める。ネットワークを活用するには、自己責任の原則が確立していないと、とんでもないことになる。ネットワークがボランティアの精神を求めるのと同時に、そこでは自己責任のルールも十分に了解されていなければならない。ここは、甘い世界ではないのだ。

ネットワークはねむらない

１７．ネットワークは、個人をかえる。

のぞき趣味は悪い、と、誰もが思っている。同じように、露出狂も、一種の狂気なのだろうから、誰もが悪いことだと確信している。なぜ、誰にも見せたくないことを、のぞき見したくなるのだろうか。なぜ、誰もみたくないことを、見せたくないのだろうか。この２つの行為には、越えてはいけない境界を越えるという共通点があり、その越境が、いまの社会的なルールでは悪いというレッテルを貼られる行為なのである。ここには、プライベートな世界という明確な境界があり、それを外から了解なく侵害することは許されないし、また外のパブリックな世界が求める「あるべき姿」に違反して、寝間着姿で公式のパーティに出席するように、本来プライベートな世界に封じ込めておくべきことがらを、節操なく外にばらまくことは、はしたない行為である、というルールがある。これが、公私のルールである。

しかしネットワークの環境では、このルールはもはや無効である。最近流行のCCカメラをネットワークにつなげて楽しんでいる場面を考えてみよう。自分の私的な部屋にCCカメラをセットすると、通常ならば、ドアを閉じれば、そこは完全に私的な空間になるけれど、ここでは、外部から部屋の様子を覗くことができる。インターネットのホームページにこうやってカメラをつなげているサイトはたくさんあって、それなりに新しいのぞきの環境が提供されている。これは、あきらかに、自分の部屋と外部との境界を曖昧にすることで、新しい世界を生成している。この環境では、昔ならばプライベートな自分の世界に封じ込められるべきことを、そのまま外部に公開して、そのことで、新しい自分のあり方を表示しているというわけである。自分という個人を、プライベートとパブリックに明確に区分することで、自己の存在を証明する（つまりアイデンティティを確認する）のではなく、積極的に境界を曖昧にすることで、新しい自己のありかたを追求しているのである

自分の毎日の日記をネットワーク上で公開する、ということも同じような試みである。ここには、私的な世界を外部に露出することで、また外部も積極的に私的な世界に踏み込むことで、自他の社会関係を根本から変革する。のぞきも露出も、ネットワークの環境では自明なのである。これは、個人のあり方を根本から変える刺激的なメディア環境である。

ネットワークはねむらない

18. ネットワークは、コミュニケーションのモードを多様化する。

最近不倫メールが流行る、といわれる。その倫理的な評価は、ここでは問わない。重要なことは、メールでのコミュニケーションは、直接に会う対面的なコミュニケーションとか、長電話でのおしゃべりとか、手紙でのやりとりと、どこが違うのか、を考えることである。

リアルタイムでのコミュニケーションは、対面でも、電話でも、チャットでも、すぐさま相手に反応しないと、リアルタイムであることの意味がない。同時でしかも双方向的なコミュニケーションでは、双方がお互いに瞬時に反応しあう能力が期待されている。だから、とっさの機転のきく人でないと、その場を支配できないし、別の表現をすれば、しゃれたコミュニケーションを楽しむことはできない。すぐに何と応えればいいのか、その機微が理解できない人にとって、このコミュニケーションはつらい。

よく、対面のコミュニケーションは、すべてのコミュニケーションの基本だ、と思われているが、それは違う。少なくともネットワーク環境を前提にしたコミュニケーションでは、リアルタイムのコミュニケーションは、一つのモードにすぎない。チャットも、ここでは、対面的な会話と同じで、リアルタイム・モードであり、空間を共有する通常の対面と同じ機能を果たすコミュニケーション・モードである。ネットワーク環境では、空間的な距離は意味を失うので、対面も、チャットも、リアルタイムのコミュニケーション・モードという点では同じである。もちろん、その先駆はすでに電話にあり、学校でおしゃべりして、家に帰ってからもその続きを長電話でする、典型的な女子学生は、距離を無視すれば、全く同じことをしているのである。それは、リアルタイムのコミュニケーション・モードなのである。

これにたいして、昔から手紙というモードもあった。これは、リアルタイムのコミュニケーションを求めない。その意味では、もう一つの新しいコミュニケーションのモードである。ここには熟慮する時間がある。返事を書くのにじっくりと時間をかけることができる。ラブレターがいい例で、相手になんと応えればいいのか、最適なフレーズを探すのに1週間をかけても、相手は怒らない。そのくらいの時間をかけたほうが、ラブレターの価値は高まるものである。安易に返事を書くことは、戦略的にも好ましいものではなからう。

手紙のようなコミュニケーションは、十分な時間をかけて応えることができる。手紙には、相手との空間的な距離が長いから、それだけ時間がかかり、だからその分だけ社会心理的な距離が長い、という論理がある。距離がゼロならば、応答の時間もかぎりなくゼロに近くしなければならぬ。同様に、距離が長ければ、応答の時間も長くなる。ここには、空間的距離と時間の長さとの心理的距離は素直に関連している。だから、手紙をもらって、あまりにも素早く返事を書くことは、ビジネスレターを除けば、失礼なことである。

しかし電子メールは違う。ここでのビジネスでは、素早い応答が期待されるが、そうでない場合は、ほどほどの時間差が楽しい。非同期の魅力がここにある。すぐには応えない、でも、ほどほどの時間で応える。そのほどほどにずれた時間差にこそ、新しいコミュニケーションの極意がある。ちょっと考える、しかしそんなに真剣には考えない。でも対面のように、安直には応えない。それなりに考える。その意味では、思考回路が十分に作動しなければならない。このレベルでのコミュニケーションは、電子メール以前には存在しなかった。だから、このレベルでのコミュニケーションが得意な人は、いままでのコミュニケーションモードでは埋もれていたのだ。やっとここで新しい自分を表現できるようになった。喜ばしいことだ。

メールでのやりとりは、手紙のように重たくないし、対面のトークのように、直感的でもない。ほどほどなのだ。ここでは軽くて、しかしちょっと思考するコミットメントが期待されている。だから、メールでのやりとりは、ポップな感覚ですすめられる。それだけ自由度が高い。これがメールでの恋愛を新たに誘発する。新しい距離感覚が新しい関係をもたらしたのだ。

ネットワークはねむらない

19. ネットワークは、行動ではなく、情報の論理に生きる。

ネットワークでのコミュニケーションを考えると、そこでは、当然のことだけど、生身の人の行動で語ることはできない。つまり行動としてではなく、情報としてのコミュニケーションが問題なのだ。ネットワーク以前の段階では、人は、コミュニケーション行動を重視するが、新しい環境では、行動はみえない。あるのは、情報であり、情報からみたコミュニケーションが問題なのだ。

では、行動と情報では何か違いがあるのか。おありである。行動は、行動する主体と不可分であるから、時間と空間つまり「いま」と「ここ」の制約の中で、あることを選択する結果が行動として採用される。ここには、時空間の制約と、無限の行動選択肢のなかから一つを選ぶという制約が2重に重くのしかかってくる。しかも行動は、行動が起こった瞬間に消去される。これが行動の原理である。しかも行動の選択基準として、合理性が優先されるとき、それはモダンマンを特徴づける基本的な行動選択ルールになるのだ。

これにたいして、ネットワーク環境では、いつでも・どこでもが前提であるし、生身の人間を介したコミュニケーションはそもそもできない環境だから、必然的に、行動という視点は消去される。行動にかわるのは情報しかない。情報は、行動が瞬間ごとに選択され、そして次の瞬間にはすでに消えているものであるのにたいして、永遠に消去されず、アーカイブとして記録保存される。だから、情報はデータベース化される。記録され保存されれば、時間と空間を超えて存在し、いつでも・どこでも活用されるものになる。しかもそれ自体は、選択される結果ではないから、選択以前の存在として、ばらばらのまま（つまり多様な存在として）格納される。それがデータベースとなって、情報は記録の宝庫になる。しかも情報それ自体の価値は減らない。情報は、コミュニケーションの過程で、相手に伝達されても、それによってなくなることはない。ものが伝達によって、所有移転され、手元には残らないのとは対照的に、情報それ自体は消滅しない。情報は、流通されて、はじめて価値が発生する点では、ものの流通と共通するが、さらに重要なことは、情報は流通によってどんどん拡散するのであって、拡散することで情報が共有されないかぎり、情報の価値は産まれなない。情報は密かに所有していても、ネットワーク環境では意味をなさない。情報を希少性で考えること自体が、ここでは意味がない。情報のアバンダンスが重要なのだ。

ネットワークはねむらない

20 . ネットワークは、エイジェントによって自己の拡張をもたらす。

ネットワークには、エイジェントという考えがある。サーチエンジンを活用して、自分の知りたいことをネットワークの中を探索するとき、自分ではなく、その代理人が世界中を走り回り、知りたい答えをもってきてくれる。その代理人がエイジェントである。ネットワークにおける探索と支援の考えを実現するには、エイジェントという考え方が不可欠である。

エイジェントは、ネットワーク環境における自分（僕）である。身体をもった自分は、ネットワークの中を走ることはできない。だからその代わりが必要になる。エイジェントは、ネットワーク社会では、身体としての自分よりも、自分そのもの（新しい僕）になる。その意味からすると、生身の自分は、「ネットワークの中のエイジェント」のエイジェントでしかない。つまり新しいネットワークの世界では、本物の自分は、ネットワークの中の自分であり、生身の自分はその分身でしかない、という逆転が起こる。

もちろん、どちらが本物なのか、あるいはどちらがエイジェント（代理人）なのか、という論議はほとんど意味がない。結論はどちらでもいい。生身の自分もネットワークの中のエイジェントも、ともに同じ自分そのものだ、という認識が肝心である。多様な自分をリアルな自分として納得できるか、それが問題である。どちらかの自分にしかリアリティを確定することができず、他方の自分に、フェイクの自分を想定することで、ひとつの自分に統合感をもたせよう（これが、アイデンティティ）とするかぎり、ネットワークのエイジェントは、その人にとっては、どこまでもフェイクな代理人でしかないのだろう。

しかし、そうではないのだ。エイジェントは、拡張された自分である。行動に制約された自分は、あまりにも狭い自分でしかない。エイジェントを内包させた自分は、ネットワークの中のすべての情報を活用可能なデータベースとして利用する能力をもった個人なので、ここではネットワーク環境そのものが拡張された自己となる。つまり環境はすでに自分の内部に取りこめられた世界であり、その世界がどのようなエイジェントによって探索されているかによって、その個人の個性が決定されてくるのである。ネットワークでは、自分の個性は、エイジェントによって、さらに多様な個性をもつのである。

ネットワークはねむらない

2 1 . 携帯家族のすすめ

ネットワークが自明になる世界で、家族はどうなるのか。現在、まだ家族といえば『核家族』こそがその原点である、と確信されている。現実には、もっとダイナミックに家族の実情が変容しているのに、理念としては、核家族こそがもっとも家族らしい形態である、と信じられている。

核家族とは、何か。それは、外部との間に明確な境界を引いて、役割分化と専門化をもとに、もっとも効率的に目標を達成するために仕組まれた家族形態である。夫は外の組織で働き、その給料で家族の経済を支えることで主人の地位を維持し、妻はその給料をもとに、家族内の家事・炊事・育児など、あらゆる家族問題の解決の専門家として機能することで専業主婦の地位を不動なものにし、子供は、その両親の庇護のもとで、賢明に勉強していい子になると頑張らなければならない。ここに、家族の強い結束は保たれ、家族の団欒が維持される。家族の絆は、ここでは一番大切なものである。そのシンボルが、夫婦間に独占されたセックスであり、その愛の結晶としての子供の誕生である。こうして、核家族は、近代産業社会を支える社会基盤として重要な機能を担うのである。

ネットワークの社会になると、このような家族は、その歴史的な使命を終え、まったく新しい家族へ、その地位を譲ることになる。では、どうなるのか。箇条書きにししてみよう。

1) 専業主婦はなくなる。つまり家事専門で無給という専業の女性の仕事は廃棄される。大人は、ジェンダーの関係なく、みんなフルタイムで働くことが、基本原則になる。

2) 働く場所は、どこでもいい。家庭は、もはや団欒だけの場所ではない。十分の仕事をする場所として復活する。単純な意味での職場という考えも消滅する。

3) 家事は、誰でも、家族のメンバーならば、当然のこととしてシェアされる。主人は、外で働くから家事免除という特権は一切ない。炊事洗濯も、男らしい仕事の一部となる。専業主婦がなくなれば、主人という考えもなくなる。

4) 家族は、物理的な家という空間によって定義されない。家族は、家庭という場ではなく、絆という関係によって定義される。これは、同居という概念が放棄されることを意味する。夫婦が別居していても、そこに絆が維持されているかぎり、家庭は存在する。ネットワークは、空間よりも関係を支持するのだ。

5) 夫婦間でのセックスの独占というルールは、場の共有（同居）の放棄に伴い、解除される。セックスと愛情の蜜月は、同居という場の共有を前提として成立する関係なので、その前提の崩壊に伴って、新しい関係が生成される。そもそも、愛情とセックスと生活（経済的な扶養）という三位一体は、核家族を構成する原理であるが、それはネットワークの社会では、その有効性を失う。

6) 家族は、その境界を閉じない。そのシンボルがセックスの独占であるが、それ以上に、境界の曖昧さは、さまざまな変化をもたらす。その兆候は、すでに昔から、テレビと電話という、過去のメディアが家庭に入った段階からすでに始まっていたが、この傾向は、ネットワーク社会では、さらに一層徹底される。ネットワークは、従来のマスメディア以上に、境界を乗り越え、外部とのコミュニケーションを積極的に誘発させるメディアである。

7) 子供や高齢者という、社会的弱者にたいする扶養の問題は、すでに家族の境界の中で解消されるテーマではない。専業主婦が一人でじっと我慢して、この弱者の世話をするという事態はなくなる。弱者は、家族の境界を超えて、コミュニティにはきだされなければならない。ここに、新しいコミュニティが必要になる。核家族を超えるには、家族だけではなく、ネットワークに支えられたコミュニティが不可欠である。

こうして、家族はネットワーク環境によって根本的にかわるはずである。少なくとも、ネットワークの論理を詰めれば、核家族の終焉は自明である。そこで、ネットワーク社会に期待される新しい家族形態を、ここでは携帯家族と呼ぶことにする。

ネットワークはねむらない

22. 新しい家族の絆 -- 幻想から構造へ --

携帯家族になると、家族の絆は強くなるのか、それとも弱くなるのか。

核家族の時代、実態としての家族の絆は、家族メンバーが家にいるときだけ、さらに厳密に言えば、居間で一家団欒を楽しんでいるときだけ確認されるものでしかなかった。だから、家から一歩外に出たとき、家族のメンバーは誰でも、外向けの顔をした。たとえば、主人は、満員の通勤電車に乗れば、単なるオヤジの顔になるし、やっと会社に着すれば、その瞬間から、部長とか課長という組織の顔になった。つまり家から一歩でて、周り近所の顔見知りとの接触がなくなる瞬間から、彼は主人ではなくなり、ストリートでのマス（大衆）というまったく別の個人に変身する。そして顔の見えない誰かという顔をした後、会社について、もうひとつの仮面をかぶることになる。課長なりの地位は、その人のもうひとつの明確な顔である。家での主人と会社での課長が、彼の自己イメージを確定する素顔で、ストリートや盛り場での匿名性のなかのマスという顔は、もうひとつの隠された自分である。

こうしてみると、家族での主人の顔がいかに少ない時間しか演じられていないことが理解されよう。核家族での主人の典型は、郊外の団地に居住して、夜遅くまで都心の会社で仕事をし、帰ったらすぐに寝て、朝は早くから通勤電車にもまれて出勤するまじめなサラリーマンである。とすれば、まじめなサラリーマンであるほど、家族との団欒はますます限定されざるをえない。彼にとって、家に仕事を持ち込むことはタブーであり、だからこそ、家庭を出たら、すぐに主人の顔を放棄しなければならない。ということは、主人である時間はものすごく少ないから、そこでの家族の絆は実態としてはかなり細く弱くなる。だから、逆に、彼は「幻想としての家族の絆」に固執する。現実には、家族の絆を維持できないからこそ、幻想としての家族の絆に価値をもたせ、家族はいつも一体なのだ、という意識の洗脳が不可欠になる。その洗脳の核が、愛情とセックスと扶養の三位一体の原則である。

しかし携帯家族には、そのような幻想は皆無である。その意味では、家族の絆はあまりにも危うい。イデオロギー（幻想）がない分、簡単に絆は解消されてしまう。しかし携帯家族は、その現実において、家族の絆を大切にする。理由は、携帯家族には、その絆を維持するのに必要なネットワーク環境があるからである。24時間、いつでも、どこでも、家族の絆は生活環境として維持されている。その「構造」がこの新しい家族の絆を支える。核家族での幻想は、ここではネットワーク環境それ自体に代替される。この変容は大きい。イデオロギーとしての絆から、構造としての絆へと、家族を支える絆は、その実態を大きく変化させる。

このようなネットワークの構造に支えられると、家庭での主人は、会社でも、ストリートでも、家庭の主人の顔をもつことが可能になる。会社でも、主人の顔をもち、反対に家庭でも課長の顔をもつ。かつてのように、いくつもの顔を場所によって使い分けるのではなく、いつでもどこでも、いくつもの顔をみせることが可能になる。これが新しい家族形態を構成する基本原則である。仕事をしながら、子供の世話をする、それを、SOHOのように自宅でもすることもでき、また都心のオフィスでも、ネットワーク環境を利用して、子育てを实践することもできる。その結果、家族の絆は、構造として、しっかりしたものになる。もはや幻想の絆に翻弄されることはない。ネットワーク環境という構造が、新しい家族の絆を支えるのである。

ネットワークはねむらない

23. 専業主婦は、もういない。

ネットワークは、境界を曖昧にする。この命題が家族での役割に関して適応されたら、専業という考え方は否定させる。主人は外で働き、主婦は内で家を守る、という機能的な関係は放棄される。しかも機能的な関係は、フェミニズムからの批判にあったように、非対称的な特性をもつから、外で働く主人は、内を守る専業主婦よりも、高い地位 権力をもつことになる。確かに、主人と主婦の役割分担がないかぎり、核家族としての目的達成（頑張って、一戸建ての家を築く）は、困難ではある。頑張って残業して高い給料を取る主人と、それを節約してたくさん貯蓄するしっかり者の専業主婦というコンビは、貧しい生活から逃れ、豊かな生活を目指す過程では十分に有効なコンビであった。しかし豊かさの階段を一步一步上るにつれて、そこで賢明に頑張る姿に、自己矛盾を感じてくるようになった。とくに女性には、対等なコンビのはずなのに、地位が低い、という不満があった。その不満は、豊かさの獲得過程で、どんどん拡大し、ついにバブルの崩壊と同時に、主人の社会的地位の低下（悲劇的なミドルのリストラ）が決定的になったことに呼応して、夫婦の危機、そして核家族の危機はもはや回避できないまでにいたった。

その危機を、新しいフレームで再構築すれば、危機は危機でなくなり、みんなハッピーになれる、と予告したのが、ネットワークなのである。ネットワーク環境の浸透は、今までのような分業 役割分担の考え方を放棄させる。女性は、このとき自らの意志で行動する自由を獲得する。その自由は、専業主婦の地位を放棄させ、自らの力を試すべく、社会に進出することを強要する。主人の給料の何割が専業主婦の値段だ、といった姑息な手段ではなく、自力で稼ぐという正当な根拠に基づいて、女性は社会の波に足を突っ込んでいくのだ。

ネットワーク環境では、女性は、そのジェンダーのハンディキャップを足枷とすることなく、あるいは家庭に閉じこめることを正当化することなく、専業主婦であることを止めることが賢明な選択なのである。そうしないかぎり、女性に未来はない。しかしここで発せられる疑問は、弱い子供や高齢者の面倒を誰が見るのよ、ということだろう。その解決の基本は、核家族という境界に閉じたままの状態で、思い切り解放することである。つまり家族は閉じてはならない。家族の境界を解き、もっと広い空間の中で、社会的弱者の面倒をみることである。そのとき、弱者はもはや弱者ではなくなる、というトリックがここには隠されているのだ。それが、ネットワークがもたらす、新しい家族へのプレゼントなのである。だから、専業主婦は、もう、そろそろ卒業しなければならない。携帯家族に、専業主婦は似合わない。

以上は、まだ現実的な話ではないのかもしれない。でも、コンセプトとしては、これしかない、という論理は正当であると確信している。現実には、いつも保守的で、最後は否定されるものなのである。

ネットワークはねむらない

24. 恋愛の絆では、ネットワークを維持できない。

国威発揚の映画を観て、多くの人は、そのイデオロギー性に呆れ、「なんで、あんなに国家のために、自分のすべてをささげることができるんだろう」と、疑問に思うことだろう。しかしあの『タイタニック』しかり、今の僕たちの社会には、その国威発揚の代わりに、「恋愛至上主義」のイデオロギーがある。これは、近代社会が産んだかなり歪んだ歴史的な産物である。

このイデオロギーがもっとも鮮明に反映されるのが、家族関係である。そこで、簡単にまとめると、家族形成の原理は、その歴史的展開において、まずは親子関係（血縁）を核にして形成されてきた。父系か母系かの差異はあっても、血縁によって家族は維持されていた。それが近代以前のことであり、その家族形態の拡散として、上記のような国威発揚のイデオロギーがあるのだ。そこでは国家（主席）は父であり、人民は子である。これが、近代以前の社会形成の原理である。

それが、近代社会になると、親子関係に代わって、男女関係が優位になった。そのシンボルが恋愛関係である。血のつながりから、愛のつながりが優先させる家族へと、家族形成の基本原則が変化したのだ。だから、近代社会における核家族は、まずは男女の恋愛から形成されなければならない。愛の絆は、血の絆を超えるものになった。今のハリウッド映画で、執拗なまでに恋愛の価値が高揚されているのは、このような社会的な理由があるからである。無意識に、ぼくたちは、そのイデオロギーに浸り、これこそが人間のあり方なのだ、と信じている。まさに恋愛至上主義によるマインドコントロールの成果である。つまり核家族では、愛がすべての本質なのだ。それを無視して、核家族は成立しない。ほんの少し前までは、誰もが血縁によるイエの継承こそが家族（伝統的家族）のあるべき姿だ、と信じていたのに、今では、誰もが、愛がすべてだ、と信じきっている。

問題はここからである。恋愛は、近代社会の根幹を支える『私的所有』の概念を素直に継承しているので、つぎのような2つの排他性のルールにしたがっている。1つは、「もしも、ある人Xが、他のある人Yを自分のものだ、と主張すれば、他のいかなる人Zは、ある人Yを自分のものだとは主張できない」というルールである。もう1つは、「もしも、ある人Xが、ある人Yを自分のものだ、と主張すれば、その人Xは、ある人Y以外のいかなる人Zをも自分のものだ、とは主張できない」というルールである。これが私的所有のルールであり、これに恋愛も準拠している以上、男女がともに、相互に排他性のルールに従うので、相互に一人の相手しか愛さず、ここに愛の独占が二人の愛を正当化する、という論理が成立する。恋愛・結婚そして愛の結晶としての子供の誕生という一連の核家族の生成・維持のプロセスは、愛の排他性をもとに構築された近代社会そのものの縮図である。もっとも、現実的には、ジェンダー論者が批判したように、この原理を遵守させられたのが女性だけで、男性は排他性の原則をかなり無視していた、という事実は自明であり、それが、ジェンダーの非対称性として、核家族批判の論拠とされたことも事実である。ただ基本的なコンセプトとしては、愛の相互的な排他性のルールによってしか、核家族の成立はありえないのである。さて、ここで問題にすべきことは、恋愛が排他性という私的所有概念そのものから構成されていることである。なぜそれが問題なのかといえは、ネットワークの関係では、排他性を重視する私的所有は基本的には拒否されているからである。ということは、ネットワーク環境と核家族は真正面から矛盾する関係にある。とすると、ネットワーク環境を優先するとしたら、核家族を支えた恋愛価値に代わる、第3の関係生成の原理が想定されなければならない。とすると、すでに親子関係（血縁）と男女関係（恋愛）は却下されるので、残りは、ただひとつ「きょうだい関係」しかない。これは、親子関係のような上下・権力関係でもなく、男女関係のような排他的・独占的な恋愛関係でもなく、弱い者同士の、しかもジェンダーを超えた、相互依存・支援的な友情（パートナーシップ）を原則とする絆である。ここから、新しい家族を形成しようとすると、まったく今までとは異質な家族形態ができるはずである。これが、携帯家族を支える根本的な原理になるかもしれない。

ネットワークはねむらない

25. 第3の絆、友情で家族は生成できるのか？

きょうだい関係は、広がりをもつ。「きょうだいは、他人の始まり」という諺があるように、きょうだい関係は、親にも配偶者にも拘束されないから、つねに外部へのつながりをもって家族を維持している。

核家族では、恋愛の絆が男女関係に閉じているので、家族の境界を越えて、家族としての広がりはない。どこまでも閉じることで、核家族が機能する。これにたいして、親子関係からなる伝統的家族では、血縁が、その縦のつながりとして、家族を拡張する機能を果たすので、ここに親族が形成される。その親族の最大の拡張として、伝統的な国家が成立するのである。

きょうだい関係は、血縁の縦系列の拡張とは対照的に、横のつながりの拡張をもたらす。家族を超えた拡張性をもつという点では、恋愛の絆とは違って血縁に似ているが、その拡張性の方向にかなして、血縁とは明らかに異なっている。では、それは何か。

(1) きょうだい関係は、よわい者(フラジャイル)同士のつながりである。したがって、この関係を維持するには、権力(血縁における親)と恋愛の場合ように、所有による関係づけではなく、非所有(何も無い、だから助けて)をもとに生成される「探索と支援」の関係に頼らざるをえない。

(2) その探索と支援は、狭い家族の領域では、まったく充足されないから、つねに外部へと関係づけが拡張される。自分の家族は、その意味では、非常に弱い拘束しかもたず、その境界は柔らかくならざるをえない。自分の家族は、したがって、閉じることなく、外部への依存(探索と支援)を前提として構成される。

(3) きょうだいは、性別を問わないから、家族は、男女のカップルを前提とすることはない。ゲイ・ルズ・ビアン(ゲイ・ルズ・ビアン)の家族も、ここでは成立可能である。

(4) 通常の弱者である子供や高齢者は、その扶養を外部に委託される存在である。しかし、そもそも家族の主たる構成者さえも弱い存在(概念としてであるが)であるから、ここでは、家族全員がみんな弱い者でしかない。とすれば、子供や高齢者を、自分の家族の内部に抱えて面倒をみなければならない、という資格も規範もここにはない。素直に外部との関係で扶養することが望ましい、という論理が導かれる。

(5) きょうだいの絆である「友情(きょうだい愛)」とは何か。恋愛の愛が相手を奪うことであるのに対して、友情の愛は、相手を支えることである。自分が強いから奪うのと対照的に、ここでは、自分は弱いから相手を支える(尽くす)のである。これは、ボランティアの精神そのものである。友情(友愛/フレンドシップ/パートナーシップ)は、その意味では、ボランティアとしての振る舞いである。つまり友情はネットワークにおける精神そのものである。ネットワーク環境になかで家族を構成しようとすれば、二人は、それが男女関係であっても、恋愛である以上に友愛(ボランティアの精神)の絆を優先して、自分の家族を生成しようとする。

このようにみると、ネットワーク環境と家族との関係では、きょうだいの絆の原理がもっともふさわしい。親子関係にみる階層的な関係(血縁)も、男女(夫婦)関係にみる機能関係(恋愛)も、ネットワーク環境を支える関係としての適合性が欠落している。そして第3の絆であるきょうだい関係が示す友愛/ボランティアの精神だけが、ネットワーク的な関係を支持する。とすれば、新しいネットワーク社会には、新しい第3の絆をもとに、新しい家族が構成されなければならない。それが、携帯家族を支える新しい絆である。